様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２００１５

研究課題名（和文）アリストテレスの存在論における「本質」と「現実態」の哲学的意義に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Philosophical Significance of Essence and Actuality in Aristotle's Theory of Being

研究代表者
岩田　圭一（IWATA, Keiichi）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：００３８６５０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「本質」と「現実態」の意義を明らかにすることを目的として、それらの概念が主題的に論じられる『形而上学』中核諸巻（ＺＨΘ巻）の実体論について総括的な研究を行った。「現実態」概念の意義を考えるにあたって考察する必要のある「可能態－現実態」論に関しては、存在論だけでなく、『魂論』第2巻から第3巻にかけて論じられている感覚論も取り上げ、その対概念の多様な用法を見るとともに、共通感覚に関する論述のうちに内省的意識の働きへの関心を読み取り、アリストテレスの感覚論の現代的意義について考察した。

研究成果の概要（英文）：This study was made to clarify the philosophical significance of the notions of essence and actuality, covering the central books of Aristotle's Metaphysics. Regarding the theory of potentiality and actuality, which we should cover in deliberating the meaning of actuality, I examined not only Aristotle's theory of being but also the theory of perception and took a closer look at various uses of the notions of potentiality and actuality. Further, this study considered reflective awareness through an examination of passages on common sense and attempted to find the contemporary significance of Aristotle's theory of perception.

研究分野：古代ギリシア哲学

キーワード：アリストテレス　形而上学　実体論　本質　現実態　可能態　魂論　共通感覚

１．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、アリストテレス『形而上学』中核諸巻（ＺＨΘ巻）における実体論の研究を中心に行ってきた。『カテゴリー論』第1－5章に見られる存在論、『自然学』第1巻第7章と第3巻第1章に見られる生成および運動に関する学説、『形而上学』Ｚ巻における「ウーシアー（*ousia*）（実体／本質（*to ti ên einai*）ないし形相（*eidos*）としての〈実体〉）に関するアリストテレスの主張、定義論、普遍（*to katholou*）に関する見解（イデア論批判を含む）、『形而上学』Ｈ巻における質料（*hulê*）と形相との一性に関する見解、質料のあり方に関する見解、『形而上学』Θ巻におけるデュナミス（*dunamis*）（能力／可能性）論、「可能態－現実態（*energeia/entelecheia*）」論、『魂論』第2巻第1－2章における魂（*psuchê*）一般に関する見解など、実体論に関係するアリストテレスの見解や主張について考察を行ってきた。研究代表者はこれまで積み上げてきた個々の研究をつなげて、アリストテレスの実体論に関する一つの一貫した解釈を提示する必要性、さらに、存在論の枠を超えて形而上学的諸概念の哲学的意義を考える必要性を認識し、本研究を開始することとした。

２．研究の目的

本研究では、『形而上学』中核諸巻の実体論の再検討を行うとともに、『魂論』第2巻後半における感覚論および第3巻第1－2章における共通感覚（*koinê aisthêsis*）論を考察の対象として取り上げた。本研究の目的は、それらのテクストの解釈を通じてアリストテレスの実体論について一貫した解釈を提示するとともに、感覚論における性質的変化（*alloiôsis*）に関する解釈上の問題の検討を通じて感覚論について一定の解釈を提示し、さらに、曖昧さのある共通感覚に関する見解を吟味してその現代的意義を明らかにすることであった。

３．研究の方法

本研究の目的を果たすにあたっては、これまでの研究で扱ったテクスト（『形而上学』中核諸巻、『カテゴリー論』第1－5章、『自然学』第1巻第7章および第3巻第1章、『魂論』第2巻第1－2章など）をあらためて読み直し、これまでに行った解釈を再検討するとともに、新たに扱うテクスト（『魂論』第2巻後半および第3巻第1－2章）について丹念な読解と緻密な解釈を行うこととした。テクストの再検討、読解、解釈においては、先行する多数の研究文献を参照することとし、諸解釈の是非をテクストに照らして検討、吟味した。工夫された優れた解釈については批判的に摂取しながら、独自のテクスト解釈を提示することを試みた。

これまでの研究で扱ったテクストの再検討に際しては、これまでに提示した、実体の存在論的身分に関する独自の解釈の再検討、イデア論批判を含む普遍に関するアリストテレスの主張に対する解釈の再検討、「本質」、「形相」、「現実態」が同一視されることの意義に関する検討、質料に適用される「可能態」の用法に関する解釈の再検討をとくに重要な課題として行った。

４．研究成果

2012年度は、「現実態」の哲学的意義を明らかにする上で不可欠の役割を果たす「可能態」の概念と、この「可能態」概念によって説明される「質料」概念について、これまでの研究成果を再検討し、アリストテレスの実体論を「質料」の問題を中心に据えて捉え直すという作業を行い、研究発表を行った。同時に、アリストテレスの実体論に関するこれまでの研究成果について再検討を行い、自身の実体論研究の体系的な整備を行った。再検討の対象としてこの年度に取り上げた内容は以下のとおりである。『カテゴリー論』第1－5章における実体と属性の問題、『形而上学』Δ巻およびＺ巻第1章における実体と付帯性の問題、『形而上学』Ｚ巻第4－6章の本質論における個物と本質の独特な関係、『自然学』第1巻第7章における生成論と「質料」概念の導入、『自然学』第3巻第1章における可能的にあるものとしての質料のあり方、『形而上学』Ｚ巻第10－11章の定義論における「質料」の問題、Ｚ巻第17章の原因論における質料と形相のあり方、Ｈ巻第2－3章における差異ないし現実態としての形相のあり方、Ｚ巻第13－16章における「普遍」の問題、およびそこから読み取れる個別的な形相と普遍的な形相との関係について再検討を行い、解釈の修正を行いながら体系的な整備を行った。

2013年度は、「可能態」概念について再考するとともに、『魂論』第2巻第5－12章における感覚一般と個別的感覚に関する見解を取り上げ、感覚論における「可能態―現実態」の対概念の用法を明らかにした。「可能態」概念の再考にあたっては、『形而上学』Θ巻第1－5章におけるデュナミス論において、能力としてのデュナミスから可能態としてのデュナミスが明らかにされていく過程を辿り、そこにアリストテレスの関心の移行を読み取るという仕方で、「可能態」概念が明示される道筋に一定の説明を与えた。その上で、「可能態」が質料に適用されることの意義について考察を行い、アリストテレスの実体論におけるデュナミス論の意義を明らかにした。その成果は学会のシンポジウムにおいて発表した。

感覚論の考察にあたっては、個別的感覚がその対象を受容して感覚が成立する際にその感覚が性質的変化とみなされていることを問題として取り上げた。この性質的変化に関して解釈者たちは、感覚器官の側で物理的な変化が起こっているとするか、あるいは魂

において形相的な変化が起こっているにすぎないとするかで分かれている。本研究では、「可能態－現実態」が感覚の問題に適用される仕方に注意して当該のテクストを注意深く読解し、後者の解釈がアリストテレスの感覚論の解釈として適切であることを明らかにした。

2014 年度は、共通感覚について論じられている『魂論』第 3 巻第 1－2 章を中心に取り上げ、心の内省的な意識の働きに相当する共通感覚の働きについて考察を行った。共通感覚は、個別的な感覚にとって固有である感覚対象（例えば視覚にとっての色）とは異なる共通的なもの（例えば運動や形など）を対象としているが、アリストテレスはそのような意味での共通感覚のほかに、いわゆる心の内省的な働きとしての共通感覚を考えている。例えば白くて甘いという感覚的な認識において白と甘さを区別する（識別する）という内省的な働きを共通感覚に帰している。さらに、感覚対象を感覚する主体が一定の感覚対象を感覚していることを自ら感覚するという自己認識を可能にする能力も、共通の能力としての共通感覚であるとされる。これについては『魂論』の論述に加えて、『自然学小論集』の関連箇所を参照することによって、そうした共通感覚の働き、そしてその働きに対応する身体の支配的な部分について一定の理解を得た。先行研究を参照することによって、そうした支配的な部分が、現在われわれに理解されている中枢神経系に相当することを確認し、アリストテレスが心の内省的な働きを形相としての魂だけによって説明しようとしていたわけではないことを明らかにした。個別の感覚的経験や表象、記憶、情動など複雑な要素をもつ心の働きが、身体の中の支配的な部分を基体として成り立っているというアリストテレスの見解は、心の働きという複雑な働きへの最初の哲学的なアプローチとして重要な意義をもっていると言える。

ところで共通感覚の働きへの言及は『ニコマコス倫理学』第 9 巻第 9 章の一節にも見られる。そこにおいて、自己認識を可能にする共通感覚の能力の発揮（活動）と、そのような感覚をもつ主体の存在とが結びつけられていることを確認し、アリストテレスが人間の存在を、活動する限りのものとして理解していることを明らかにした。自分自身の存在を活動において捉える見方は、アリストテレスの倫理学における幸福（*eudaimonia*）観にも見られるものであり、現代において人間の生を考える上で顧みられるべき意義深い考え方であると言える。この点については、『ニコマコス倫理学』における幸福論、すなわち、徳（*aretê*）（卓越性）に従った魂の活動としての幸福という見解を取り上げることによって、倫理学における形而上学的思考の展開を見ることによって理解を深めることができると考えられるので、今後の研究においては『ニコマコス倫理学』における幸福論、倫理的徳に関する見解、知性的徳に関する見解を取り上げることにしたい。

この最終年度においては、『形而上学』中核諸巻における実体論の全体をあらためて詳細に検討し、「本質」、「形相」、「現実態」という重要な概念のそれぞれについて理解を深め、なぜそれらの概念が同一視されるのかについて、『形而上学』中核諸巻および関連テクスト（『魂論』第 2 巻など）に基づいて考察した。アリストテレスは『形而上学』中核諸巻の序盤において、論理学的著作と関係する観点（論理学的観点）に立って、個物を本質そのものとみなす独自の主張を行っているが、その後すぐに、自然学的な観点から、個物に内在する形相を本質とみなしている。研究代表者は、この論理学的観点から自然学的観点への移行のうちに、「本質」と「形相」とが同一視されるゆえんを求めた。「形相」と「現実態」との同一視に関しては自明のものとも言うことができるが、本研究によって、その同一視が、個別的実体が生成してきたものであるという事実に基づいているということ、また当の個別的実体の生成がそれによって説明されるところの目的論的な考え方を基礎にしているということが明らかになった。

なお、本研究の最初の年度から行っていた実体論解釈の再検討という作業の成果は、全 14 章からなる単著という形で公にすることができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①<u>岩田圭一</u>「アリストテレスの魂論における自己認識の可能性」、九州大学哲学会『哲学論文集』50 号、pp.103-121、2014.12（査読有）.

②<u>岩田圭一</u>「アリストテレスの感覚論における「性質的変化」の問題」、早稲田大学哲学会『フィロソフィア』101 号、pp.1-26、2014.3（査読無）.

〔学会発表〕（計２件）

①<u>岩田圭一</u>「本質・形相・現実態――アリストテレスの存在理解――」、哲学会、2014.11.1、東京大学駒場キャンパス（査読無）.

②<u>岩田圭一</u>「アリストテレスのデュナミス論と「質料」の概念」、早稲田大学哲学会、シンポジウム「デュナミスの射程」、2013.7.13、早稲田大学戸山キャンパス（査読無）.

〔図書〕（計１件）

①<u>岩田圭一</u>『アリストテレスの存在論――〈実体〉とは何か――』、早稲田大学出版部、2015.3.31.

〔研究会発表〕（計１件）
①岩田圭一「アリストテレスの実体論における「質料」の問題」、西日本古代哲学会、2012.4.29、福岡大学セミナーハウス.

６．研究組織
(1)研究代表者
岩田　圭一（IWATA Keiichi）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：００３８６５０９